新潟県埋蔵文化財調査報告書 第195集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXI

桂 木 田 遺 跡

2009

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXI

桂（かつら）木（ぎ）田（だ）遺跡

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は新潟市を起点に、日本海側を北上し青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成14年度に胎内市の中条インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海沿岸東北自動車道の中条―朝日間は日本道路公団が有料道路として建設することとなりました。その後、公団の民営化により、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国土開発幹線自動車道建設会議において、荒川―朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。

日本海沿岸東北自動車道は地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等の「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「桂木田遺跡」の調査報告書です。調査によって、弥生時代中期の遺構・遺物が見つかりました。新潟県北部の平野部では当該期の調査事例が少なく、当時の人々の暮らしぶりはよくわかっていません。桂木田遺跡で検出された遺構・遺物も少量で、小規模短期的な活動の場と推測されます。出土した土器は東北地方の影響が色濃いものですが、一部、北陸地方の製作技術も取り入れるなど、当時、日本海沿いの交流が盛んであったことがうかがえます。

今回の発掘調査成果が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っています。

最後にこの調査に参加された地元の方々や区長並びに村上市教育委員会には、多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所および三面川沿岸土地改良区には調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成21年3月

新潟県教育委員会

教育長　武藤　克己

例　　言

1　本報告書は、新潟県村上市十川字桂木田 94 － 3 ほかに所在する桂木田遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会が国土交通省羽越河川国道事務所から受託して実施した。

3　発掘調査は、新潟県教育委員会が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団に調査を依頼し、更に委託を受けた株式会社吉田建設が、平成 20 年 4 月から 6 月にかけて実施した。発掘調査面積は 2,670 ㎡である。

4　整理及び報告に関わる作業は、平成 20 年 7 月 1 日～平成 20 年 9 月 30 日の間、新潟市秋葉区古田 2574 － 6 の整理事務所にて行った。

5　出土遺物及び記録類は、新潟県教育委員会が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の注記記号は「カツラ」とした。また出土地点および層位を併記した。

6　引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に掲載した。

7　本書に掲載した遺物番号は通し番号とし、本文・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

8　本書の方位は、真北である。ただし、ここでいう「真北」とは、日本平面国家座標の X 軸方向を示す。

9　本書の執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 1 ……鈴木俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課課長代理）
第Ⅰ章 2・第Ⅱ章・第Ⅲ章・Ⅳ章・Ⅵ章 1 ……平田貴正（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部主任調査員）
第Ⅴ章・Ⅵ章 2 ……百瀬正恒（　　同　　調査員）

10　本書の編集は、鈴木俊成の指導の下、平田貴正が行った。

11　本書の発掘・報告書の作成にあたって、以下の方々からご教示とご協力を頂いた。ここに記して厚く御礼を申し上げる（敬称略、五十音順）。

秋本　雅彦　　阿部　泰之　　石川日出志　　石川　博行　　北村　和穂　　齋藤　準　　野神　伸
野田　豊文　　森田　信博　　吉田　好孝
阿賀町教育委員会　　村上市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説……1

1　調査に至る経緯……1

2　調 査 経 過……1

A　試掘調査……1

B　本発掘調査……2

C　整理作業……3

D　調査・整理体制……3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……4

1　遺跡の位置……4

2　地理的環境……4

3　周辺の遺跡……4

第Ⅲ章　調査の概要……6

1　グリッドの設定……6

2　基 本 層 序……6

第Ⅳ章　遺　　構……9

1　遺 構 各 説……9

A　弥生時代……9

a　遺物集中地点……9　　b　土　　坑……9

B　中世以降……10

a　焼土遺構……10　　b　炭化物集中地点……10

C　自然流路……10

第Ⅴ章　遺　　物……11

1　概　　要……11

2　弥生時代の出土遺物……11

A　土　　器……11

B　石　　器……12

第Ⅵ章　ま と め……13

1　弥生時代の遺構……13

2　出土した弥生土器の様相……13

《要　約》…… 15
《引用・参考文献》…… 16

挿図目次

第１図　試掘調査トレンチ設定図 …… 2
第２図　遺跡の位置と近隣の弥生時代の遺跡 …… 5
第３図　グリッド設定図 …… 6
第４図　基本層序柱状図 …… 8

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 4
第２表　遺構・遺物観察表 …… 17

図版目次

［図面］
図版１　桂木田遺跡　全体図
図版２　SX12、SK11・13
図版３　SX06、SR17
図版４　弥生時代の遺物

［写真］
図版５　調査区全景
図版６　基本層序
図版７　SX12
図版８　SK11・13
図版９　SX06、SR17ほか
図版10　弥生時代の出土遺物

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道（以下､｢日沿道｣とする）は､新潟空港インターチェンジ（以下､｢IC｣とする）を起点として日本海側を北上し、青森県に至る高規格幹線道路である。本遺跡が所在する中条・朝日IC間は、平成10年4月に施行命令が出された。

中条・朝日IC間の埋蔵文化財の分布調査は、新潟県教育委員会（以下、｢県教委｣とする）から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下､｢埋文事業団｣とする）が平成11年度に実施した。調査の結果、旧神林村以北の道路法線上に5か所の遺跡（新発見も含む）と15か所の遺跡推定地について試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。本遺跡を含む遺跡推定地12の試掘調査は、平成19年に31,890㎡を対象として実施した。その結果、3か所（村上市下新保字高田、同市下新保字堂の前、同市十川字桂木田）で遺構・遺物を検出し、新発見の遺跡として登録した。

平成20年2月14・15日、国交省・県教委・埋文事業団の協議で、日沿道工事に係る平成20年度の調査か所（7遺跡）が決定された。

桂木田遺跡の本発掘調査面積は、高速自動車道早期供用のため、当面、暫定二車線部分に調査範囲を限定した平成20年の協議により2,670㎡とし、調査体制については平成16年度から実施している埋文事業団職員の管理・監督のもと民間の調査機関に全部委託するという方式をとった。

2　調査経過

A　試掘調査

試掘調査は、新潟県教育委員会から委託を受けた新潟県埋蔵文化財調査事業団が平成19年7月2日から7月26日にかけて実施した。県道鶴岡村上線以北の日本海沿岸東北自動車道建設予定地内（遺跡推定地12）に121か所の調査坑（トレンチ、以下「T」とする。）を任意に設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。そして土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。その結果3地点から遺構・遺物を確認し、それぞれを、小字名から「下新保高田遺跡｣、「堂の前遺跡｣、「桂木田遺跡」として遺跡登録した。桂木田遺跡の範囲内で遺構・遺物を確認したトレンチは、97・106・107Tの3か所である。

97Tからは直径4m、深さ15㎝ほどの浅い掘り込みが検出された。その中央部分には、地床炉とみられる焼土が直径40㎝程の範囲で検出された。掘り込み形状と炉の位置から竪穴住居である可能性が極めて高いと考えられたが、柱穴は検出できなかった。また、炉の周囲からは、弥生時代中期の土器が出土し、遺構の年代を反映する資料と考えられた。

106Tにおいては、遺物包含層から1点の弥生土器が出土したものの、周辺のトレンチでは出土せず、分布の広がりやまとまりを認めることはできなかった。

107Tからは、2基の土坑が隣接して検出された。いずれも直径1m、深さ15㎝ほどの規模を測る。遺

物は出土しなかったものの、覆土が97 Tの竪穴住居と酷似することから同時期（弥生時代中期）の遺構と判断された。覆土には、多量の炭化物や焼土粒が観察され、その判別は竪穴住居より容易であった。

なお、遺物の出土が確認されない溝が、110 Tにおいて検出された。その覆土は灰色～褐灰色を呈するものであり、弥生時代のそれとは明らかに異なる。溝の覆土は近世以降に堆積したⅠ'層に近く、ほかのトレンチにおいては同質の土層から近世陶磁器が出土し、これらの溝は近世以降のものと判断した。

B　本発掘調査

本発掘調査（以下「本調査」とする）は、試掘調査の成果に基づき2,670㎡を対象に行った。4月初旬にプレハブ建設や駐車場の整備、作業員募集等の準備期間を経て、4月中旬から調査を開始した。

調査区は水田に囲まれた場所であり、確認面が現水田面より低くなることから、調査区外周に排水用開渠を設けた。また調査区は、用水路と現農道により南北に分断され、便宜上南側を1区、北側を2区と呼称した。

調査は遺構・遺物を確認した107T・97Tを再掘することから始め、地山面までの深さ・層序の確認作業を行なった。確認後、重機（バックホー）にて4月15日から1区の表土除去を開始した。表土除去は、試掘にて弥生時代の包含層とされたⅡb層上面までとした。調査区のほぼ中央を南北に走るDグリッドと、これに交差する東西20mグリッドごとに断面観察用のベルトを残した。

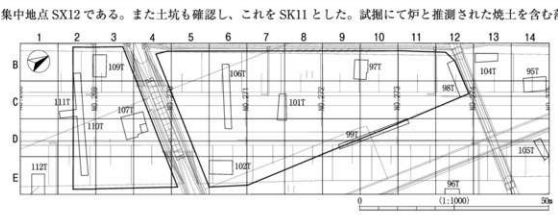
4月18日以降、2区の表土除去作業を開始し、これと並行して土層の層序区分を実施した。土層区分終了後、ベルト沿いにⅡb層以下の土層堆積、並びに遺構・遺物の確認用として、幅20㎝、深さ30㎝のトレンチを設定し、これを掘り下げた。

排水用開渠、及びトレンチ掘削の終了した1区から遺構精査を開始したが、トレンチ内を含め、中世以前の遺構・遺物は検出できなかった。また2区ではⅠ'層を混入する近世の溝5条と近世の遺物を検出したが、1区同様、Ⅱb層上面で中世以前の遺構・遺物は検出できなかった。

このように、一部を除きⅡb層上面で遺構・遺物が全く確認されない状況から、すでに検出していた近世の遺構調査と並行して、弥生時代の包含層であるⅡb層の除去作業を行うこととした。Ⅱb層除去作業は、遺構が確認された試掘97T・107T周辺は人力にて、それ以外は重機を使用することとした。

6月2日から、焼土遺構SX06周辺を除く1区の包含層除去に入った。焼土遺構SX06の調査も並行したが、遺物は1点も出土しなかった。

2区10Bグリッド（試掘97T）付近の精査を人力にて継続し、点在ながらも弥生土器を検出した。遺物集中地点SX12である。また土坑も確認し、これをSK11とした。試掘にて炉と推測された焼土を含む落



第1図　試掘調査トレンチ設定図

ち込みを SK13 とした。SX12、SK11・13 の調査終了後、1m 四方のメッシュ状にサブトレンチを設定し、同地区の遺構・遺物の最終確認を実施したが、何も検出できなかった。

調査終了に向けて 6 月 16 日に県教委の終了確認を得、同 30 日に調査を全て終了し、7 月 4 日国土交通省へ現地を引き渡した。

C　整 理 作 業

現地調査終了後の 7 月初旬、新潟市内の整理事務所にて、遺物の注記・接合・復元・実測作業に入り、8 月以降は遺構・遺物実測図のトレース、図版作成、写真撮影、原稿執筆等を行った。

D　調査・整理体制

試掘調査と本調査および整理作業は、以下のような期間と体制で行った。

【試掘調査】

調査期間　平成 19 年 7 月 2 日～7 月 26 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　木村　正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）

　　斎藤　　栄（　同　総務課長）

　　藤巻　正信（　同　調査課長）

庶　　務　長谷川　靖（　同　総務課主任）

調査担当　加藤　　学（　同　調査課班長）

【本調査・整理作業】

調査期間　平成 20 年 4 月 15 日～6 月 30 日

整理期間　平成 20 年 7 月 1 日～平成 20 年 9 月 30 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　木村　正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）

　　斎藤　　栄（　同　総務課長）

調査総括　藤巻　正信（　同　調査課長）

監　　督　鈴木　俊成（　同　調査課課長代理）

　　木村　雄司（　同　調査課主任調査員）

庶　　務　長谷川　靖（　同　総務課班長）

調査組織　株式会社吉田建設

現場代理人　川上　浩　（株式会社吉田建設土木課課長）

調 査 担 当　平田　貴正（　同　埋蔵文化財調査部主任調査員）

調　査　員　百瀬　正恒（　同　埋蔵文化財調査部調査員）

　　青木　利文（　同　埋蔵文化財調査部調査員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

桂木田遺跡は県道 349 号線沿いの水田地帯、村上市十川字桂木田 94 － 3 ほかに位置する。

新潟県は大きく上・中・下越地方に三分されるが、本遺跡の所在する村上市は下越地方の北端に位置し、北は山形県鶴岡市に隣接する。

現在の村上市は平成 20 年 3 月に村上市、荒川町、神林村、朝日村、山北町が合併し成立している。

2　地理的環境

桂木田遺跡は、日本海の海岸沿いに長く広がる越後平野の北東端に近く、東に飯豊朝日山系、北西に蒲萄山地を望む地に位置する。飯豊朝日山系の以東岳に源を発する三面川や小河川により開析された沖積地の微高地上に立地している。

遺跡周辺の現況は水田で、地表は東の山側から西の日本海側にかけて緩やかに傾斜している。遺跡周辺の水田面の標高は 15.7m 程を測り、弥生時代の遺構確認面の標高は 15.1m 程である。

3　周辺の遺跡（第 2 図）

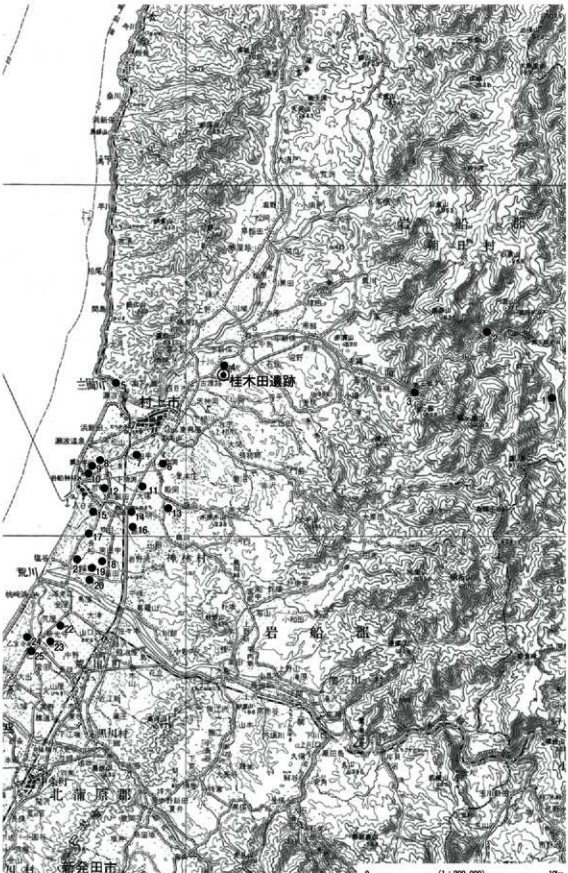
桂木田遺跡では弥生時代と中世以降の遺構・遺物を検出した。ここでは、本遺跡の中心時期である弥生時代について、同時代の周辺遺跡を概観してみたい。

下越地方北部の調査事例からすると、該期の遺跡は荒川から阿賀野川にかけての砂丘上、もしくはその後背湿地上に立地しているものが多いが、行政区分である村上市に限れば、三面川の河岸段丘（滝の前遺跡〔関 1972〕、二又遺跡〔大滝・四柳 1997〕、岩崩遺跡〔野田 2001〕など）や砂丘（砂山遺跡〔田辺 2008〕、長松遺跡〔田辺 1991〕など）、沖積地（衣田遺跡〔田辺・土生 2001〕、中部遺跡〔田辺 2007〕など）のそれぞれに分布が見られる。この内、段丘上の滝の前遺跡や砂丘上の砂山遺跡などでは住居が見つかり、当時の暮らしぶりの一端が垣間見られたが、当時の状況を知る資料は総じて少なく、特に沖積地（低地）の資料は貧弱である。

近年の日沿道関連調査では、本遺跡も含め弥生時代遺跡の調査が相次ぎ、特に沖積地（低地）での活動を示す資料が蓄積されつつある。道端遺跡〔前川 2006〕（中期後葉）では住居の検出や、稲作の証となる石製収穫具の出土。中曽根遺跡〔青木 2006〕（中期末葉～後葉）や堂の前遺跡〔石川 2008〕（中期中葉～後葉）では住居の可能性を示す遺構の検出など、沖積地（低地）への進出とその活動の一つの類型を示す段階に入ってきている。また、丘陵上の山元遺跡〔滝沢 2007〕では最北の高地性環濠集落が見つかり、当該地域の社会情勢までも視野に入れた研究の幕開けとなった。

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	二又遺跡	6	八幡山遺跡	11	金曲遺跡	16	在ヶ付Ⅱ遺跡	21	長松遺跡
2	長者岩陰	7	山元遺跡	12	大野地遺跡	17	高田遺跡	22	中曽根遺跡
3	岩崩遺跡	8	桜田遺跡	13	城田遺跡	18	衣田遺跡	23	道端遺跡
4	堂の前遺跡	9	板清水遺跡	14	宮ノ前遺跡	19	中部北遺跡	24	乙遺跡
5	滝ノ前遺跡	10	宮の上遺跡	15	砂山遺跡	20	中部遺跡	25	城山遺跡

第 1 表　周辺の遺跡一覧



第２図　遺跡の位置と近隣の弥生時代の遺跡

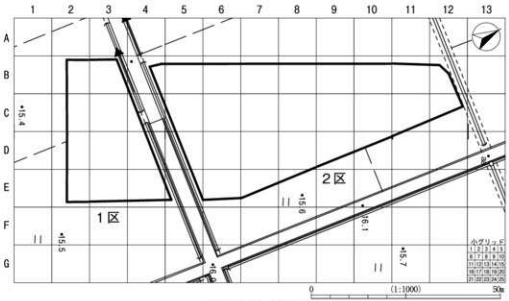
（国土地理院『村上』1:200,000原図 平成13年発行）

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

グリッドは、日沿道のセンター杭であるＳＴＡ.265+00（日本測地系Ｘ＝249336.621、Ｙ＝89115.4080）とＳＴＡ.275+00（同Ｘ＝249512.2535、Ｙ＝89211.5483）を結んだラインを南北方向の主軸とした。この南北主軸は、真北から約38°東偏している。この南北主軸と直交するように、ＳＴＡ.268+00杭を基点として10mごとに順次北へグリッドラインを設定していった。

大グリッドは10m四方で、その名称は南北方向を１～14の算用数字、東西方向をＡ～Ｈのアルファベットの大文字とし、両者を組み合わせて［7D］のように表記した。グリッド表記は南西隅を基点とした。また小グリッドは2m四方とし、１～25の算用数字で表した。小グリッドも南西隅を基点とし1、北東隅を25とした。表記は、大グリッドに続け［7D15］のように付して呼称した。なお、基点とした南西隅1Aの座標は日本測地系Ｘ＝249403.657、Ｙ＝89117.902、北西隅14Aは同Ｘ＝249517.690、Ｙ＝89180.324である。



第３図グリッド設定図

2　基本層序

調査区は現農道を境に南側を１区、北側を２区と呼称した。両区共に現況は水田で、現水田面である表土Ⅰ層から礫層のⅤ層まで、大きく５枚の土層を確認した。Ⅳ・Ⅴ層を除くⅠ～Ⅲ層が１・２区のほぼ全域で確認され、土質によって細分した。また全層に酸化鉄の沈着が認められた。

Ⅰ'層はⅠ層同様１・２区にまたがって検出されたが、２区中央部から北部にかけてⅠ'a・Ⅰ'b・Ⅰ'c・Ⅰ'dと４層に細分し得た。しかし２区中央部から１区全域にかけてはⅠ'層の層厚が薄く、また上層からの影

響をかなり受けており、ほとんど細分できなかった。I'層は、隣接する堂の前遺跡のⅡb－1層と同一層で、同遺跡の出土遺物から、古代から中世にかかる遺物包含層、並びに遺構確認面と推測した。しかし、本遺跡では当該期の遺構・遺物は検出できず、I'層、並びに細分各層の時期を明確にできなかった。近世の溝はこのI'層を切り込み、調査区内で多数検出した倒木痕の多くは、I'層からⅢa層を攪拌する。

Ⅱ層は、試掘時に中世の遺物包含層及び相当層とされた。しかし、本調査の成果では、I'層の範疇に入るものと理解できた。同じく、試掘Ⅱb層は弥生時代の遺物包含層および相当層とされた。この試掘Ⅱb層は、本調査で1・2の2層に分層し得た。

Ⅱb－1・2層は、遺物の出土状況などから弥生時代の遺物包含層と捉えられたが、Ⅱb－1層では遺構は確認できなかった。しかしⅡb－1層下部から弥生土器や炭化物が出土しており、Ⅱb－2層上面で確実に捉えられた2基の土坑もⅡb－1層中から掘り込まれた可能性がある。隣接する堂の前遺跡の弥生時代の包含層（Ⅱb－2・Ⅲa層）と本遺跡における弥生時代の包含層（Ⅱb－1・2層）は、土質はやや異なるものの同層と推測でき、両遺跡にて出土した弥生土器の検討から、堂の前Ⅱb－2層と桂木田Ⅱb－1層は弥生時代後期、同Ⅲa層と同Ⅱb－2層は同中期と推測できた。調査区内で確認した墳砂は、第4図4・11の断面に見られるようにⅡb－1層中へ噴出しており、弥生時代中期から後期に大きな地震があったと推測できた。

本遺跡における基本層序は概ね上記のとおりであるが、1区南西部2Bグリッド付近では、標高14.9m程で砂層であるⅣ層、及び礫層であるⅤ層を検出した。しかしⅡb～Ⅲ層が厚く堆積する2区中央部では、標高14.5mでⅣ層を確認できた。なお、弥生時代の最終確認面であるⅢa層上面の標高は、1区南西部2Bグリッド付近で15.1m、1区東部3Eグリッド付近で15.0m、2区中央部7Bグリッド付近で14.9m、2区東部12Cグリッド付近で14.9mを測る。1区から100m程の距離を測る2区東部までの比高差は10㎝程でほとんど差はないといえる。1区南西部のみやや高いものの、本遺跡の1区から2区にかけては、南から北に緩やかに傾斜する、ほぼ平坦な地であったと推測できた。

以下に基本層序を記す。

Ⅰ層　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）。しまり・粘性あり。表土。

I'a層　灰オリーブ色粘質シルト（5Y5/3）。しまりあり、粘性あり。

I'b層　灰色砂層（5Y4/1）。1㎜以下の粗い砂層。

I'c層　灰オリーブ色粘質シルト（5Y5/2）。しまり・粘性あり。上層に砂粒が混在する。

I'd層　灰オリーブ色粘質シルト（5Y6/2）。全体的にやや白みを帯びる。しまり・粘性あり。砂粒は含まれない。

Ⅱb－1層　灰オリーブ色粘質シルト（5Y5/3）。しまり・粘性あり。弥生時代遺物包含層。

Ⅱb－2層　黄褐色粘質土（2.5Y5/3）。しまり・粘性あり。弥生時代遺物包含層。

Ⅲa層　黄褐色粘質シルト（2.5Y5/3）。しまり・粘性あり。Ⅱb－2層に比べ、鉄分の沈着が多い。

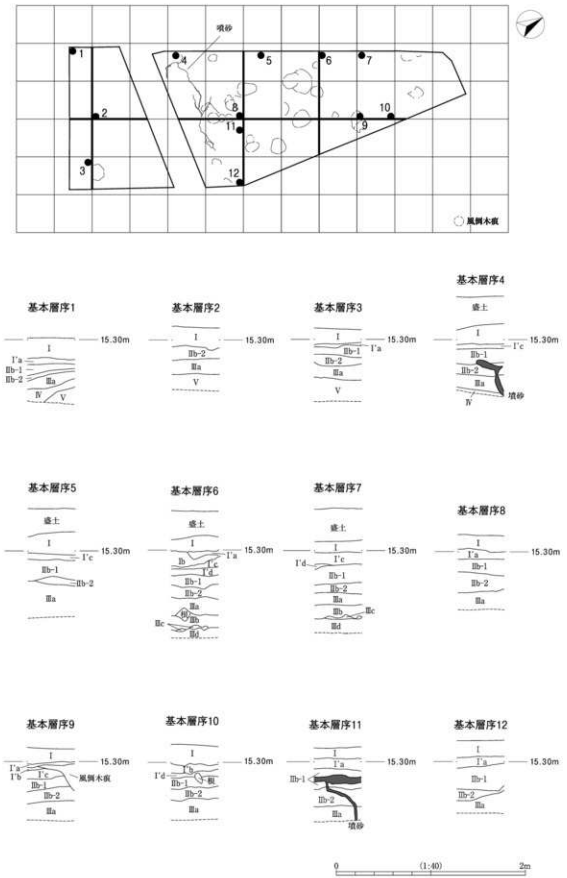
Ⅲb層　にぶい黄褐色粘質シルト（2.5Y6/4）。Ⅲa層に比べ、ややしまり弱い。粘性あり。

Ⅲc層　暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）。しまりやや弱い。粘性あり。

Ⅲd層　黄褐色粘質土（2.5Y5/2）。しまりあり。粘性やや強い。褐鉄鉱が多い。

Ⅳ層　灰オリーブ色砂層（5Y5/3）。粒子の細かい砂層。

Ⅴ層　灰オリーブ色砂礫層（5Y5/3）。砂粒は1～3㎜程で、2～7㎝程の円礫が見られる。


噴砂
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
風倒木痕
基本層序1
基本層序2
基本層序3
基本層序4
基本層序5
基本層序6
基本層序7
基本層序8
基本層序9
基本層序10
基本層序11
基本層序12
15.30m
盛土
I
I'a
I'b
I'c
I'd
Ib
Ib-1
Ib-2
IIa
IIb
IIc
IId
IIb-1
IIb-2
III
IV
V
風倒木痕
噴砂
0
(1:40)
2m

第4図　基本層序柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

1　遺構各説

A　弥生時代

a　遺物集中地点

SX12（図版2・7）

2区10Bグリッドに位置する。試掘97Tで、焼土と45点の弥生土器が検出され、竪穴住居の可能性が示唆された地点である。本調査でも、試掘97T北側にて弥生時代の包含層（Ⅱb－1・2層）から遺物が出土し、遺構の検出に努めた。しかし、試掘時にそうであったように本調査でも柱穴・周溝は確認できず、また試掘時に住居の壁とされた立ち上がりも、数か所にて断面観察を行ったが確認することができなかった。このため、この周辺をSX12遺物集中地点とし、調査を進めた。

SX12の広がりは、焼土が検出されたSK13を基点とすると、北に位置するSK11にかけて約5m、東へ3m、西へ2m程の範囲と捉えた。弥生土器39点、石器1点、自然礫1点が出土した。遺物はSK11・13を結ぶ線より東側に多く、弧状に出土した。試掘部分を含めると、全体の範囲は南北5.0m、東西4.7m前後と推測する。また炭化物がSK11の東部に比較的まとまって出土し、その広がりは東西6m、南北8m程である。

b　土　　坑

2区10Bグリッドにて、SX12の広がりと重なるようにして、2基の土坑を検出した。いずれも弥生時代の包含層であるⅡb－2層上面からの検出である。SX12の遺物出土層位や、各土坑の覆土が包含層に近似し確認しづらかった点を考慮すると、Ⅱb－1層から掘り込まれた可能性が高い。

SK11（図版2・8）

SK11は、南北を長軸とし主軸N－50°－Eを指向する。東部がややくびれる平面楕円形を呈し、南北0.7m、東西1.08m程を測る。深さは北側で10㎝、南側で5㎝程を測る。断面U字状を呈しており、やや丸みを帯びる底面から壁は緩やかに外傾する。覆土はⅡb－2層とほぼ同じ黄灰色シルトであるが、Ⅱb－2層に比べわずかに粘性・しまりが強い。また覆土上層には炭化物が点在し、この炭化物はSK11から南東側に広がるように、50数点を検出した。この近辺で炭化物がやや集中する。覆土中から、弥生土器細片2点が出土した。

SK13（図版2・8）

SK11の南5m程の距離に位置する。このSK13は、試掘97Tで地床炉と推測された遺構である。平面やや方形に近い不整円形である。その規模は、南北0.74m、東西0.68mを測る。底面はやや丸みを帯び、深さ15㎝程を測る。断面はU字状を呈し、南北の壁はやや緩やかに、東西の壁は角度を持って立ち上がる。覆土はⅡb－2層を基本とし、上位で検出した焼土は、平面円形に近い楕円形を呈する。顕著な被熱痕は確認できなかった。また覆土中には、径1㎝前後を測る焼土ブロック数点を検出した。このような焼土

の検出状況を踏まえ、地床炉、あるいは炉の掘形の可能性を残しながらも、本調査では土坑内への焼土ブロックの混入（廃棄）と推測した。

覆土中から、弥生土器細片３点が出土した。

B　中世以降（図版１）

２区で室町時代の所産と考える SD05 のほか、近世に属す溝７条（SD1・2・4・7～10）を検出した。それ以外には焼土遺構、炭化物集中地点を検出した。

a　焼土遺構

SX06（図版３・9）

１区３・4C グリッドに跨って検出した。試掘 107T で検出された焼土を混入する２基の土坑である。

本調査では、多量の焼土と炭化物をⅡｂ－１層上面から下層のⅢａ層にかけて検出した。平面形状は不整形を呈し、東西 4.75m、南北 3.25m の規模を測る。覆土はⅠ′層を主体とし、場所によっては弥生時代の包含層であるⅡｂ－１・２層に由来するブロックが混入していた。遺物は一片も出土せず、また底面には無数の穴が開くように焼土や炭化物が入り込んでおり、状況は木根に近い。人為的な遺構というより、自然的な所作と考えたい。

b　炭化物集中地点（図版１）

３か所で確認した。SX14・15・16 である。SX14・15 は２区、SX16 は１区で検出した。いずれも、炭化物の出土量は希薄である。

SX14

２区 11C グリッドのほぼ中央に位置する。炭化物の広がりは平面楕円形状で、東西 1.5m、南北 1m 程の範囲で確認した。Ⅰ′d 層からⅡｂ－１層にかかる層位での検出である。炭化物の出土量はかなり希薄で、層厚もなかった。所属時期を示すような遺物の出土もなかった。

SX15

２区 6C グリッドで検出した。SX14 の南東 46m 程に位置する。炭化物の分布は平面半円状で、東西 3.6m、南北 5.0m 程と SX14 に比べかなり広い。本跡もまたⅠ′d 層からⅡｂ－１層にかかる層位での検出である。SX14 同様、炭化物の出土量は希薄で層厚もなかった。遺物の出土もなかった。

SX16

１区 3E グリッドで検出した。先述した焼土遺構 SX06 の南東 18m 程、SX15 の南東 40m 程に位置する。炭化物は平面不正円形状に広がっており、その範囲は東西 4.3m、南北 3m 程である。Ⅰ′層下面からの検出である。SX14・15 同様、炭化物の出土量はかなり希薄で層厚もなかった。遺物の出土もなかった。

C　自然流路

SR17（図版３・9）

SR17 は１区南部 2D グリッドから 2E グリッドで東西に検出した。その延びは調査区内で 17m 程を測る。トレンチ調査で北辺は確認できたものの、南辺は調査区外でその幅員は把握していない。流路内の調査はトレンチ調査としたが、調査区内では底面を確認することができず、遺物も出土しなかった。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　要

本調査では、中・近世の遺物と弥生土器・石器が出土した。中・近世の遺物は、SD05 から出土した室町時代の所産と考える瀬戸窯の陶器鉢破片 1 点、SD01 から出土した近世有田焼の椀や皿破片などである。

出土した弥生土器は小破片 44 点で、2 区 10B グリッドの SK11・SX12・SK13 から出土した。試掘時に出土した弥生土器 45 点と合わせた 89 点が、この 10B グリッドに集中している。1 点出土した石器も 10B グリッドからの出土である。

2　弥生時代の出土遺物

試掘 97T を含めた 10B グリッドからまとまって出土した。本調査では、遺物集中地点 SX12 としてその大半を取り上げたが、5 点は SK11・13 から出土した。SX12 における出土層位は、Ⅱb－1 層とⅡb－2 層に分かれ、前者からの出土量は少ない。これを比高差でみると、0.2m 程になる。

本調査にて出土した土器で 3 点が接合した。19 は接合距離が 4m 程を測る。また、試掘調査の地点記録はないが、本調査出土土器との関係では 18 と 19 でそれぞれ接合し、図示した。

図示した 6・16・18・19・20・23・24・25 は SX12 出土、9・11・12 は SK13 出土、10 は試掘排土中から、その他は試掘 97T からの出土である。なお、SK11 から出土した 2 点は接合できたが、図示し得なかった。

A　土　　器（図版 4・10）

1 ～ 5　1 は直線的に立ち上がる体部から、口縁端部でわずかに内彎する器形の甕である。器形・胎土・施文から、2 ～ 5 は 1 と同一個体と判断できたが、接合しなかった。1 ～ 3 は磨耗により不明瞭であるが、4・5 の外面には RL 縄文が認められる。口縁端部直下に 1 条の沈線が巡る。その沈線下に、棒状工具による一本描きで、鋸歯文が崩れた形と捉えた山形文を 2 条一単位で施文する。平行沈線と山形文は接しない。沈線は連続し、沈線間の幅は 4 ～ 8 ㎜程である。2 条の山形文のうち上位の頂点が鋭角なのに対し、下位の山形は丸みを持つ。沈線一本の幅は 2 ㎜前後と幅広で、深さは 1 ㎜ほどである。山形の頂点から頂点は 5.5 ㎝ほどを測る。口唇部には縄文の圧痕が認められ、内面には長めの横位のハケ調整を施す。体部から底部は欠落する。胎土・焼成から 19 が同一個体の可能性を有するが、現段階では不明といわざるを得ない。

6・7・9 ～ 15　6 はやや開き気味の体部から、口縁端部で外反する鉢である。外面は LR 縄文を地文とし、口縁部下に 2 条の平行沈線を巡らす。その下に、1 同様に一本描きによる平行沈線で山形を施し、この山形文の下に再び平行沈線を施している。三角文とすべきであろうが、三角形と断言できないため山形文のまま記す。頂点は上下共にほぼ鋭角と言える。しかし、1 と異なり下位の山形の頂点も鋭角である。また棒状工具による沈線の幅は 1 ㎜ほどで、深さは 1 ㎜に満たない。口唇部に縄文の圧痕が施される。内面に横位のハケ調整を施す。胎土や施文から 7・9 ～ 15 は 6 と同一個体と判断できたが、接合しなかった。

8　6 に近似するが、丸みを持つ 6 の口縁部に対し、8 は口縁部内面に段を有する。口縁部の残存が少ないため個体の認識に迷うが、現段階では 6 と別個体とした。外面は LR 縄文を地文とし、口縁端部直下

に２条の平行沈線が巡る。その下に２条の平行沈線で山形文が施され、この山形文の下に再び平行沈線が施され、更にその下に山形文を繰り返す。口唇部に縄文の圧痕が認められ、内面には横位のハケ調整を施す。

16・17　壺の体部と思われる。16の外面はLR縄文を地文とし、２条の平行沈線が山形というより菱形状に施文されている。沈線幅は１㎜ほどで、深さは１㎜に満たず、施文具は６に近い。内面に横位のハケ調整を施す。17は胎土や施文から、16と同一個体と思われる。外面の沈線間にわずかに確認できる地文はLRの縄文で、体部下位はナデ調整。内面には横位のハケ調整を施す。

18・19　甕の底部である。18の外面は縦位のハケ調整、内面は横位のハケ調整である。19の外面は器面が荒れ詳細不明であるが、内面は横位のハケ調整。

20～25　何れも体部の小破片で、器形などの詳細は不明である。内外面共にハケ調整される。

これらの土器は、同一層位、同一地点での検出であるが、以下の４タイプに区分できた。

ａタイプ　１～５で、沈線は幅広く深い。地文に縄文を施文し、口縁部下に一条の平行沈線文、体部に一本描きによる２条一単位の沈線で山形文を施文。

ｂタイプ　６～15で、地文に縄文を施文。沈線の幅は狭く浅い。口縁部下に２条一単位の平行文と体部に山形文を施文。６～８は更に平行沈線を施文し、８は山形文が繰り返される。

ｃタイプ　16・17で、地文に縄文を施文し、２条の平行沈線を菱形状に施文。

ｄタイプ　20～25　体部内・外面をハケ調整。

地文でｄタイプのハケとａ～ｃの縄文と異なり、文様でａ・ｂタイプの山形とｃの菱形で異なる。また施文具でａタイプとｂ・ｃは異なる。

Ｂ　石　器　（図版４・10）

26　単剥離打面による縦長剥片素材の頁岩製エンドスクレイパー。長さ5.1㎝、幅2.7㎝、厚さ1.0㎝を測る。正面には主要剥離面と同一方向の３枚の剥離面が確認出来ることから、素材の剥片は単一打面から連続的に剥離したものを利用している。左側縁には基部から中央部にかけて微細な剥離痕があり、右側縁には基部と刃部に調整加工が施されている。刃部には裏面からの急斜度の調整加工が施され、縁辺には使用痕と見られる微細な剥離が確認出来る。

27　長さ20.6㎝、幅13.3㎝、厚さ8.3㎝を測る。使用痕は確認できず、また被熱痕や煤の付着も確認できなかった。安山岩の自然礫。

第Ⅵ章　ま　と　め

1　弥生時代の遺構

SX12とした遺物集中地点1か所と2基の土坑SK11・13を調査した。試掘106Tの1点を除き、SX12（SK11・13を含む）と試掘97Tから出土した弥生土器の総点数は89点で、桂木田遺跡で出土した弥生土器のすべてといえる。SX12の遺物は、北はSK11まで、南は試掘97Tを超えない範囲で南北5.0m、東西4.7m前後に分布する。

SK11はSX12北部で検出した。覆土中から土器2点、覆土上面で炭化物をやや集中して検出した。炭化物は南北3.5m、東西4.0m程の範囲で確認でき、それ以外では極めて少ない。

試掘97Tにて地床炉かとした焼土下で土坑を検出し、これをSK13とした。土坑覆土中から、径1㎝前後の焼土ブロック4点を検出し、土器小破片も3点出土した。

上記3基の弥生時代の遺構と遺物は広範囲から検出したものではなく、9・10Bグリッドと限られた範囲内で検出した。試掘にて焼土の検出から住居と想定されたが、本調査では柱穴・周溝・壁の立ち上がり等を確認できず、遺物・焼土・炭化物だけでは住居とすべき要因に欠けると判断し、一連の遺構と捉えながらも個別に取り扱った。

しかし、最終的に弥生時代の遺物の広がりと土坑が一か所のみに集中して確認されたことから、近隣で弥生時代の住居、ないし住居と推測された遺跡の事例を踏まえ、本遺跡の住居の可能性を再考してみたい。

弥生時代中期中葉の桂木田遺跡よりやや後出の弥生時代中期後半とされる道端遺跡［前川 2006］では、遺物・焼土（炉）・炭化物が出土し、更に柱穴・壁の立ち上がりが確認され、竪穴住居の存在が認められた。

一方、中曽根遺跡［青木 2006］では、壁の立ち上がりや周溝は未検出で、遺物・炭化物・焼土（炉）の出土と柱穴が確認されたことから、竪穴式か平地式かは不明ながらも住居の可能性を指摘している。

隣接する堂の前遺跡［石川 2008］では、炉は未検出ながら柱穴と周溝が確認され、竪穴住居の可能性が高い5基の遺構が検出されている。中曽根遺跡・堂の前遺跡は桂木田遺跡や道端遺跡よりも後出の弥生時代中期末～後期の所産である。

住居、ないし住居かとされた遺構が確認されたこれらの遺跡に共通して、遺物の出土はもちろん、柱穴の存在があげられる。しかし本遺跡では、SX12、SK11・13にて遺物・焼土が検出されたものの、周溝や壁の立ち上がりはもとより柱穴が確認されず、住居とすべき要因に欠けた。

柱穴が確認できない以上、現時点では積極的に住居とすべきではない、と考える。しかし、狭い範囲1か所のみで出土したこれらの遺構・遺物は住居の概念からは逸脱するものの、一時的、あるいは簡易な作りの住居、であった可能性が極めて高いといえる。時期や地域差を含め、今後の事例の増加に頼らざるを得ない。

2　出土した弥生土器の様相

前章にて、桂木田遺跡で出土した弥生土器を、文様や調整から4タイプの土器群に分類した。小破片が多くまた同一個体と思われる破片が多い中、出土状況からａ～ｄタイプは間違いなく共伴するものである。タイプはそのまま出土個体数に近いと考える。

新潟県における当該時期の土器編年は［渡邊 1990、金子ほか 1999］などで体系化され、現在は資料の増

加により細分化されつつある。桂木田遺跡からの土器出土量は少ないものの、新潟県下でも類例の少ない時期の資料であり、周辺の遺跡資料と比較検討をしてみたい。

村上市二叉遺跡［朝日村教育委員会 1997］から弥生時代中期中葉に属す土器が出土している。文様は変形工字文を主体とし、簡略化されたものもあるが平行沈線の下に菱形文を配し、山形文というより鋸歯状文が多い。器形は上方にわずかに開く鉢や、端部が内傾する甕がある。器形的には桂木田遺跡ａタイプ（以下、タイプ名のみ）が近く、施文でａ～ｃタイプに近い。

村上市砂山遺跡［石丸ほか2003］出土土器も、同じく中期に属する。甕の文様は重菱形文や平行沈線文に加え鋸歯文を施すものが主流を占め、小松式の影響とされる波状文もある。壺に渦文や重三角文が施文されるものがある。縄文も施されており、LR 縄文が主流を占めるがRL 縄文も認められる。主体的文様は、多条の平行沈線文や変形工字文などであるが、少量ながらａ～ｃタイプの２条１単位の山形文も存在している。甕口縁部が「く」の字状に屈曲し外傾する器形が多いが、桂木田遺跡の器形にはない。

村上市滝の前遺跡［石丸ほか2003］出土土器は、弥生時代後期に属する。交互刺突文が主で平行沈線文や山形に近いが、さらに崩れたような波状文が認められる。

弥生時代中期後半の村上市道端遺跡［前川 2006］から出土した土器は、大きく櫛描文･沈線文に大別され、沈線文にｂタイプに近い連弧文が認められる。中曽根遺跡［青木2006］ではｃタイプに近い菱形文が見られる。

近隣以外で、弥生時代前半期に属す阿賀野市猫山遺跡［古澤ほか2003］出土土器に、多条の平行沈線と共に変形工字文の菱形文や三角形をモチーフとした文様が描かれている。甕口縁部が直線的かやや内湾気味に立ち上がる器形で、鉢の口縁部は内湾気味ながらもほぼ直線的に立ち上がる。文様・器形共にａ･ｂタイプに近い。

南魚沼市長表遺跡［戸根 1986］出土土器の一部に幅の広い２条の平行沈線文と連続山形文が見られる。モチーフはａタイプと同じであるが、平行沈線や山形文に２条を超えるものがあり、ａタイプのように山形文が２条一単位で収束する例は少ない。

わずかな類例からの抽出であるが、ａタイプのような単純な文様構成を取るものは非常に少ないことがわかる。そこで器形からみると、ａタイプのように口縁端部が内傾する甕や、ｂタイプのように直線的に開く鉢状の器形は、二叉遺跡、猫山遺跡などにみられる。これに対し、砂山遺跡や中曽根遺跡ほかの甕は「く」字状に外反し、端部が受け口状に内傾するものが多い。器形から見ると、二叉遺跡の出土土器と桂木田遺跡の出土土器は並行すると考えられる 。

弥生時代前期から後期へ至る文様構成の推移をみると 、前期の変形工字文から様々な変化をしながらも沈線文が後期まで継承されていることが窺える。桂木田遺跡出土土器をタイプ別した後、ほかの弥生時代遺跡から出土した土器の文様や器形、特に外面の文様構成、沈線文に主眼を置きながら比較してみたが、ａタイプのような単純な平行沈線文と山形文で構成されるモチーフは少なく、その位置づけは困難である。ここでは変形工字文から菱形文や三角文などが成立し、山形文へ展開したと考える。

一方、地文ではａ～ｃタイプの外面に縄文、内面にはハケ調整を施し、ｄタイプは内外面共にハケ調整を施している。この施文方法は各遺跡で多数認められ、縄文は東北系、ハケ調整は北陸系の土器の特徴とされる中、両者が融合した土器は多い。桂木田遺跡出土土器も東北宇津ノ台式に北陸の施文技法を取り入れた土器であり、他遺跡の報文などで論じられているとおり、東北から北陸にかけて技術の交流が盛んであったことを示す資料の一翼を担うものと考える。

《要　約》

1　桂木田遺跡は、新潟県村上市十川字桂木田 94 － 3 ほかに所在する。

2　本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 20 年 4 月 16 日～ 6 月 30 日まで実施した。調査面積は 2,670 ㎡である。

3　桂木田遺跡は、三面川や小河川により形成された沖積地の微高地上に立地している。弥生時代の遺構確認面の標高は 15.1m 程である。

4　発掘調査にて、弥生時代中期の遺構・遺物、中世以降の遺構・遺物を検出した。

5　弥生時代の遺構は、遺物集中地点 1 か所、土坑 2 基である。遺物の広がりと土坑 2 基は重複しており、何らかの関係を有すると考えるが、詳細は不明である。

6　遺物は弥生時代中期中葉から後半代にかけての所産で、秋田県宇津ノ台式期に比定できる。東北系であるが、内面にハケ調整を施すなど北陸の土器作りの技術も認められ、当該期に日本海沿いに東北・北陸の交流が盛んであったことが窺える。

7　中世以降の遺構は、焼土遺構 1 基と炭化物集中地点 3 か所、溝 7 条である。溝以外、遺物の出土はなく、詳細な時期は不明であるが、基本層序の検討から中世以降の所産と推測した。また遺構として調査したが、焼土遺構には人為的な痕跡を見出せず、自然的所作と捉えた。

8　遺構ではないが、I 区で東西に走行する自然流路 1 条を検出した。遺物の出土もなく、また調査区外へ延びるため詳細不明であるが、土層観察から弥生時代以前と推測する。

9　同じく遺構ではないが、墳砂と風倒木痕を調査区内で多数検出した。土層の確認状況から墳砂は弥生時代、風倒木は中世以降と推測する。

《引用・参考文献》

青木　学　2006　「弥生時代の遺物」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＩ　中曽根遺跡』
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

大滝良夫・四柳嘉章　1997　「二又遺跡」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』 新潟県朝日村教育委員会

石川博行　2008　『堂の前遺跡現地説明会資料』 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川日出志　2000　「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第 11 号　新潟県考古学会

石川日出志　2004　「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駒台史学』第 120 号　駒台史学会

石川日出志ほか　2005　「関東・東北弥生土器と北海道続縄紋土器の広域編年」平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基礎研究 (B) (2) 研究成果報告書

石丸和正ほか　2003　「新潟県岩船郡域における弥生中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に－」『三面川流域の考古学』第 2 号　奥三面を考える会

伊比博和　2007　「まとめ　土器　遺構と遺跡」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅡ　道下遺跡』
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子正典ほか　1999　「第 2 節土器　第 1 項弥生前期・中期前葉」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編

品田高志　1990　「越後の後期弥生土器とその諸相－柏崎平野における北陸系土器群と人の移動－」『新潟考古学談話会会報』第 6 号　新潟考古学談話会

品田高志　1996　「編年論　越後」「YAYI」弥生土器を語る会

高野武男　1979　「山地と丘陵をめぐる地形」「URBAN KUBOTA」第 17 号

高橋　保　1990　「県内の弥生中期の土器－櫛描文系土器を中心として－」「新潟考古学談話会会報」第 6 号
新潟考古学談話会

滝沢規朗　2007　「山元遺跡」『発掘された日本列島 2007　新発見考古速報展』朝日新聞社

田中　靖　1988　「北陸地方における天王山式系土器について」「新潟考古学談話会会報」第 2 号
新潟考古学談話会

田辺早苗　1991　『神林村埋蔵文化財調査報告第 3　長松遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会

田辺早苗・土生朗治　2001　『神林村埋蔵文化財調査報告第 9　衣田遺跡・道上遺跡』新潟県神林村教育委員会

田辺早苗　2007　『神林村埋蔵文化財調査報告第 24　村内遺跡確認調査報告書』新潟県神林村教育委員会

田辺早苗　2008　『第 15 回遺跡発掘調査報告会資料』(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

戸根与八郎　1986　「弥生時代の遺物」『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　長表遺跡』新潟県教育委員会

関　雅之　1972　「滝ノ前遺跡　新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報」新潟県村上市教育委員会

野田豊文　2001　「岩崩遺跡」『三面川流域の考古学』第 1 号　奥三面を考える会

野田豊文　2005　「三面川流域における弥生時代の終わり－天王山式土器から見た新潟県内弥生後期の様相－」
『三面川流域の考古学』第 4 号　奥三面を考える会

水澤幸一　2008　「磐舟柵修理前後の北方系土器－胎内市内遺跡を中心に－」「多知波奈の考古学」

久田正弘　1991　「能登における弥生時代中期の一様相 (1) (2)」『石川考古学研究会々誌』第 34・36 号
石川考古学会

古澤妥史　2003　「弥生時代前半期の土器－文様変化についての比較・検討－」「三面川流域の考古学」第 2 号
奥三面を考える会

古澤妥史・酒井亜紀・石田守之　2003　「大割遺跡・猫山遺跡・大曲川端遺跡」新潟県京ヶ瀬村教育委員会

前川雅夫　2006　「まとめ　弥生時代の遺構と遺物」「日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＶ
道端遺跡Ⅴ」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

渡邊明和　1990　「新潟県における縄文時代晩期終末から弥生時代中期前葉の土器」「新潟考古談話会会報」
第 6 号　新潟考古学談話会

遺構一覧表

	遺構名	遺構図版	写真図版	グリッド	平面形態	断面形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	方位	検出層位	掲載出土遺物
SX06	焼土遺構	3	9	3C19・20・24・25、4C16・21	不整形	舟状状	4.75	3.25	0.34	11層	N-69°-E	1'	無
SK11	土坑	2	8	10B14・19	楕円形	台形状	1.08	0.70	0.10	2層	N-50°-E	Ⅱb-2	無
SX12	遺物集中地点	2	7	10B11～14・16～19・21～24	弧状	—	5.00	4.70	0.20	2層	—	Ⅱb-1・2	6・16・18～20・23～25
SK13	土坑	2	8	10B12・16・17	不整円形	弧状	0.74	0.68	0.15	4層	N-30°-E	Ⅱb-2	9・11・12

弥生時代の土器観察表

報告No	器種	出土位置				法量(cm)		胎土	素材	色調		焼成	調整		口唇	備考
		グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高			外面	内面		外面	内面	(x/36)	
1	甕	試掘97T	—	Ⅱ層	(19.2)	—	(5.1)	密	長石・石英	2.5Y7/3浅黄色	10YR4/2灰黄褐色	やや不良	摩耗により不明　沈線文（山形文）	ハケ	10	
2	甕	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(3.8)	密	長石・石英	2.5Y7/3浅黄色	10YR4/2灰黄褐色	やや不良	摩耗により不明　沈線文（山形文）	ハケ	4	1と同一個体。
3	甕	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(3.7)	密	長石・石英	2.5Y7/3浅黄色	10YR4/2灰黄褐色	やや不良	摩耗により不明　沈線文（山形文）	ハケ	3	1と同一個体。
4	甕	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(4.4)	密	長石・石英	2.5Y7/3浅黄色	10YR4/2灰黄褐色	やや不良	縄文　沈線文（山形文）	ハケ	6	1と同一個体か。
5	甕	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(2.9)	密	長石・石英	2.5Y7/3浅黄色	10YR4/2灰黄褐色	やや不良	縄文　沈線文（山形文）	ハケ	4	1と同一個体か。
6	鉢	25区10B18・22	SX12	Ⅱb-1層		—	(4.5)	密	長石・礫	2.5Y7/4浅黄色	2.5Y7/4浅黄色	良	縄文　沈線文（山形文）	ハケ	1	
7	鉢	試掘97T	—	Ⅱ層		—	(4.2)	密	長石・礫	2.5Y7/4浅黄色	2.5Y7/4浅黄色	良	縄文　沈線文（山形文か）	ハケ	—	6と同一個体か。
8	鉢	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(5.8)	密	長石・礫	2.5Y5/3黄褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	良	縄文	ハケ	—	6と同一文様。
9	鉢	25区10B17	SK13	覆土1層	—	—	(4.5)	やや密	長石・石英	2.5Y6/3にぶい黄色	2.5Y6/3にぶい黄色	良	縄文→ナデ　沈線文（山形文か）	ハケ	—	
10	—	25区鉢土	—	表土	—	—	(3.7)	密	長石	2.5Y6/4にぶい黄色	2.5Y6/3にぶい黄色	良	縄文	ハケ	—	
11	—	25区10B17	SK13	覆土2層	—	—	(2.8)	密	長石やや密・石英	2.5Y4/1黄灰色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	縄文	ハケ	—	
12	—	25区10B17	SK13	覆土3層	—	—	(1.5)	密	長石・石英	2.5Y6/1黄灰色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	ナデ　沈線文（山形文か）	ハケ	—	
13	—	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(2.3)	密	長石・石英	10YR5/8黄褐色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	縄文	ハケ	—	
14	—	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(2.0)	密	長石・石英	2.5Y3/2黒褐色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	縄文　沈線文（山形文か）	ハケ	—	
15	壺	試掘98T	—	Ⅱ層	—	—	(2.4)	やや密	長石・石英	2.5Y6/1黄灰色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	縄文→ナデ	ハケ	—	
16	壺	25区10B22	SX12	Ⅱb-2層	—	—	(7.4)	密	長石・石英	2.5Y7/3浅黄色	2.5Y6/4にぶい黄色	やや不良	縄文	ハケ	—	
17	—	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(4.6)	密	長石・石英	2.5Y6/3にぶい黄色	2.5Y7/3浅黄色	良	ハケ	ハケ	—	
18	甕	試掘97T・25区10B18	SX12	Ⅱb-1層	—	6.0	(3.8)	密	長石・石英	2.5Y6/4にぶい黄色	2.5Y6/8明黄褐色	良	ハケ　底部圧痕	ハケ	—	
19	甕	試掘97・25区10B11・21	SX12	Ⅱb-2層	—	7.4	(13.4)	密	長石・石英	2.5Y7/4浅黄色	5Y6/1灰色	やや不良	ハケ　底部圧痕	ハケ	—	1と同一個体か。
20	—	25区10B19	SX12	Ⅱb-1層	—	—	(5.5)	やや密	長石・石英	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y7/1灰白色	やや不良	ハケ	ハケ	—	
21	—	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(5.6)	密	長石・石英	2.5Y6/4にぶい黄色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	ハケ	ハケ	—	
22	—	試掘97T	—	Ⅱ層	—	—	(2.5)	密	長石・石英	2.5Y4/2暗灰黄色	2.5Y5/2暗灰黄色	良	ハケ	ハケ	—	
23	—	25区10B22	SX12	Ⅱb-2層	—	—	(3.9)	密	長石・石英	2.5Y6/4にぶい黄色	2.5Y6/4にぶい黄色	良	ハケ	ハケ	—	
24	—	25区10B22	SX12	Ⅱb-2層	—	—	(3.7)	やや密	長石・石英	2.5Y6/4にぶい黄色	2.5Y6/8明黄褐色	良	ハケ	ハケ	—	
25	—	25区10B22	SX12	Ⅱb-1層	—	—	(2.7)	やや密	長石・礫	2.5Y6/4にぶい黄色	2.5Y6/8明黄褐色	良	ナデ	摩滅	—	

弥生時代の石器観察表

報告番号	器種	出土層位		法量				石材	備　考
		グリッド	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
26	エンドスクレイパー	10B13	SX12・Ⅱb-2層	5.1	2.7	1.0	10.8	頁岩	
27	礫	10B17	SX12・Ⅱb-1層	20.6	13.3	8.3	3431	凝灰岩	

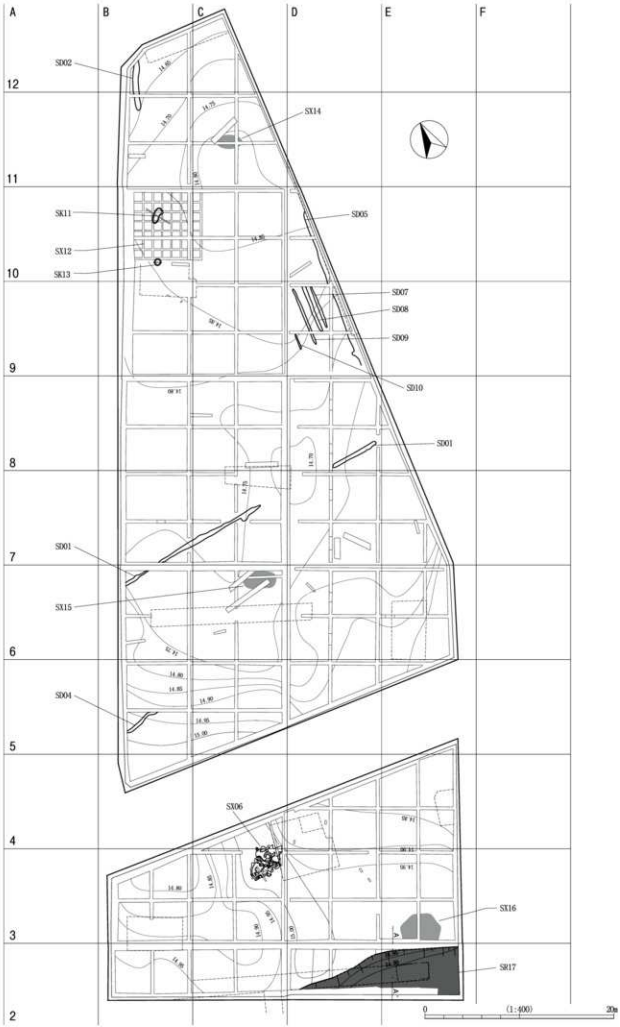
第2表　遺構・遺物観察表

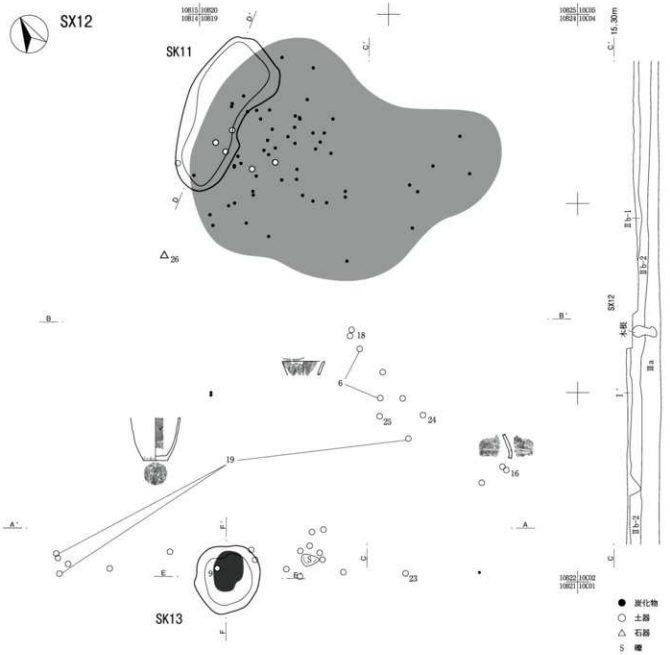
図　　版

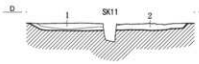
凡　例

焼土

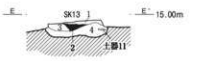
炭化物


A
B
C
D
E
F
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
SD02
SX14
SK11
SD05
SX12
SK13
SD07
SD08
SD09
SD10
SD01
SD01
SX15
SD04
SX06
SX16
SR17
0
(1:400)
20m





1層　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/6）　径1～5mm程の炭化物を含む。
2層　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/6）　鉄分沈着。

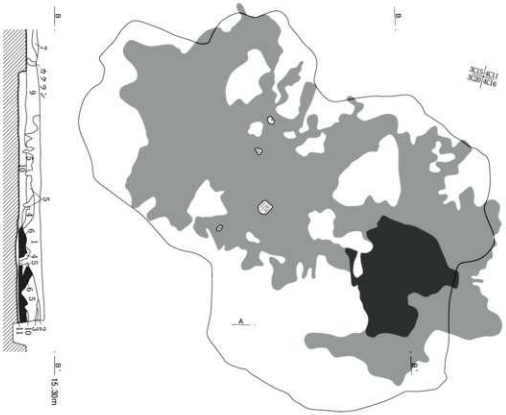


1層　暗オリーブ色粘質土（5Y4/4）
　　やや砂質。
2層　暗赤褐色シルト（2.5YR3/6）
3層　オリーブ色シルト（5Y5/6）
　　炭化物・径1mm程の焼土粒を含む。
4層　灰色粘質土（5Y4/1）
　　径1cm前後の焼土ブロック数点含む。

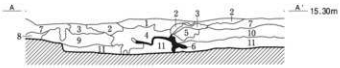
SX12
1層　灰色シルト（7.5Y5/1）　1～3mm程の砂粒含む。下層に鉄分沈着。しまり・粘性あり。
2層　灰色シルト（7.5Y5/1）　1～2mmの砂粒をやや密に含む。しまり・粘性弱い。

0　(1:40)　2m

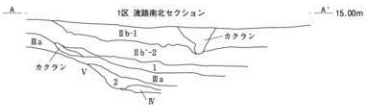
SX06



1層　灰色シルト(10Y5/1)
　　炭化物（径3～10mm）やや密、焼土ブロックを含む。
　　しまりあり、粘性弱い。
2層　灰色シルト(10Y5/1)
　　1に近似するが、全体に砂質で炭化物少ない。
　　しまりあり、粘性弱い。
3層　オリーブ灰色シルト(5Y5/2)
　　Ⅱa層小ブロックを含む。炭化物（径2～3mm）を含む。
　　しまりあり、粘性弱い。
4層　灰黄褐色シルト(10YR4/2)
　　焼土(10R5/8赤色)ブロックと炭化物（径5mm前後）を最も
　　多く含む。しまり強い、粘性なし。
5層　浅黄色シルト(5Y7/4)
　　炭化物を微量に混入。しまりやや弱い、粘性弱い。
6層　赤色シルト(10R5/8)
　　焼土粒・同ブロックを密に含む。しまりやや強い、粘性弱い。
7層　オリーブ黄色シルト(5Y6/4)
　　炭化物（径5～10mm）を疎に含む。しまりあり、粘性なし。
8層　オリーブ黄色シルト(5Y6/4)
　　7に近似するも炭化物はとんど含まず、やや砂質。
　　しまりあり、粘性なし。
9層　黄褐色シルト(2.5Y5/3)　　Ⅱb-1層
10層　にぶい黄色シルト(2.5Y6/3)　Ⅱb-2層
11層　にぶい黄色シルト(2.5Y6/4)　Ⅱa層

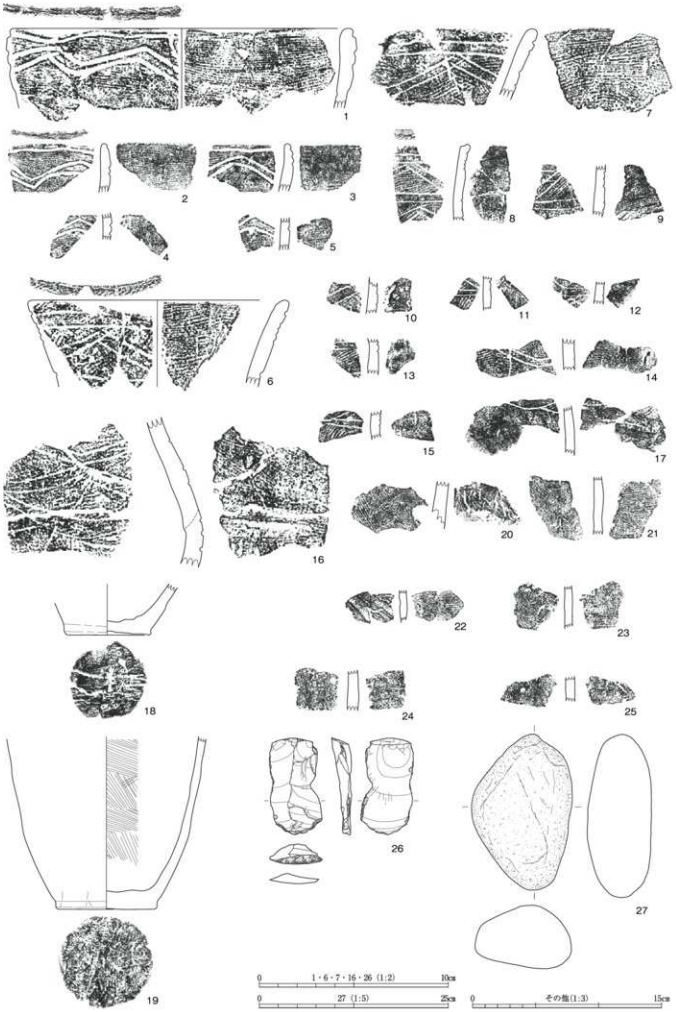


SR17



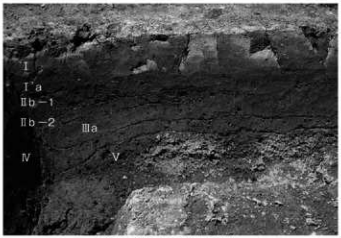
1層　明黄褐色シルト(2.5Y7/6)　Ⅱa層に近似するも、砂粒を混入する。
2層　明黄褐色砂質土(2.5Y7/6)　Ⅳ層に近似するも、5YR#1.7/1黒の鉱物粒(φ2～5mm程)を多量に含む。

平面図・断面図　0　(1:40)　2m

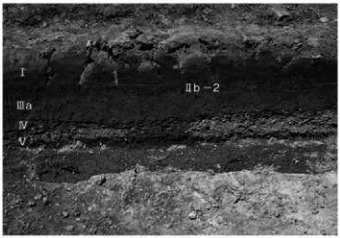

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0　1・6・7・16・26 (1:2)　10cm
0　27 (1:5)　25cm
0　その他(1:3)　15cm

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）



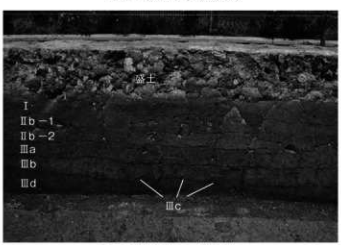
1 区　基本層序 1（東から）



1 区　基本層序 2（東から）

1 区　基本層序 3（北から）

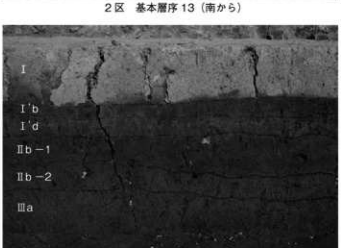
1 区　基本層序 4（東から）



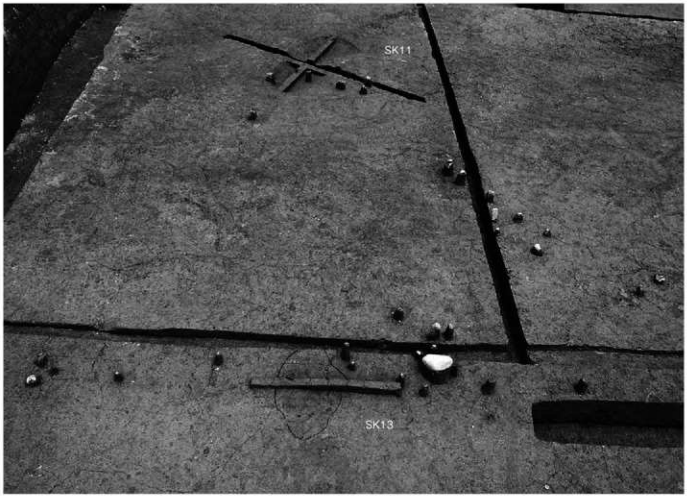
2 区　基本層序 11（東から）

2 区　基本層序 13（南から）

2 区　基本層序 15（西から）



2 区　基本層序 15（西から）



SX12 遺物出土状況（南から）

SX12 遺物出土状況近景（北から）

SX12　No.16 出土状況（東から）

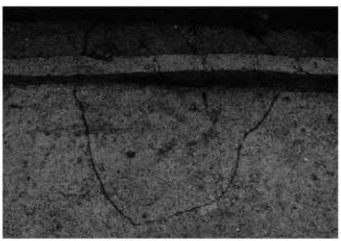
SX12 東西断面（北から）

SX12 南北断面（東から）

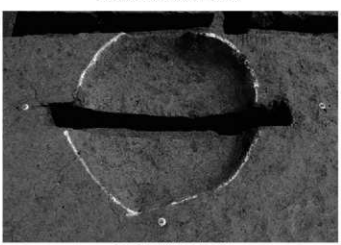
SK11 検出状況（北から）

SK11 断面（西から）

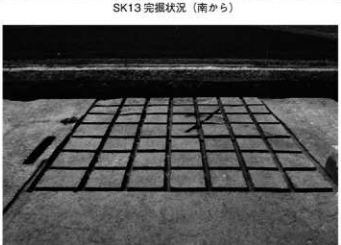
SK11 完掘状況（北から）


SK13 焼土検出状況（南から）

SK13 東西断面（南から）


SK13 完掘状況（南から）

SX12 トレンチ調査（南から）


SX12 トレンチ調査（東から）

SX06 検出状況（東から）

SX06 断面（南から）

SX06 完掘状況（東から）

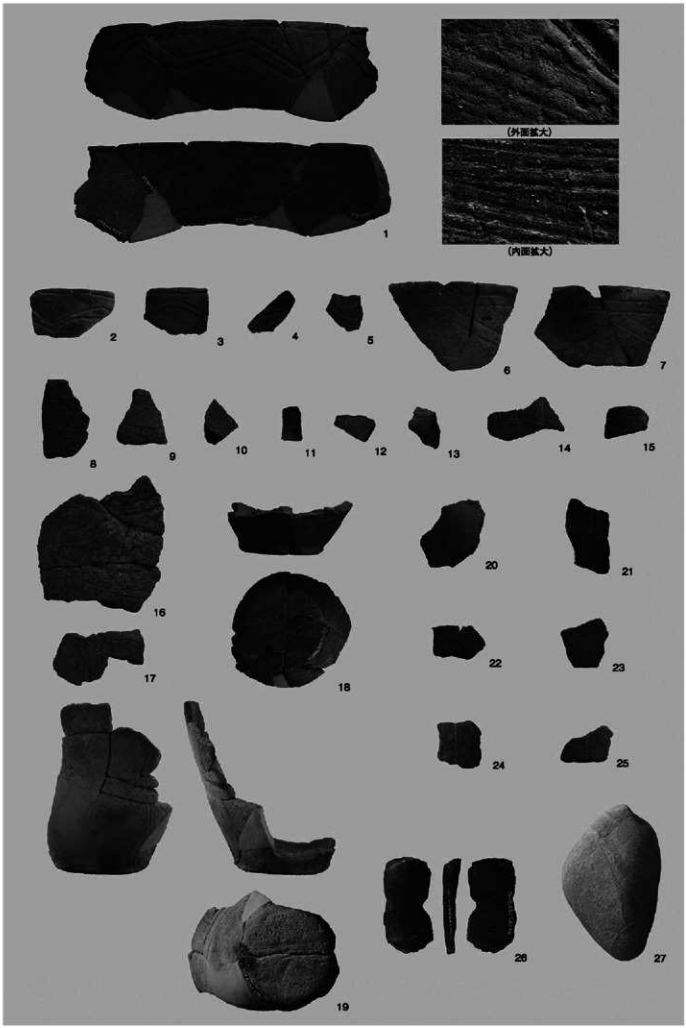
SR17 検出状況（南西から）

SR17 断面（東から）

噴砂検出状況（西から）

風倒木痕検出状況（東から）

風倒木痕断面（南から）


(外面拡大)
(内面拡大)
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

報告書抄録

ふりがな	かつらぎだいせき
書名	桂木田遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	XXXI
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第195集
編著者名	平田貴正・百瀬正恒（株式会社 吉田建設）、鈴木俊成（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社吉田建設
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒953-0042 新潟県新潟市西蒲区赤鉛1307番地1 TEL 0256(72)2391 株式会社 吉田建設
発行年月日	西暦2009（平成21）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所収遺跡	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かつらぎだいせき 桂木田遺跡	新潟県村上市 十川字桂木田 94-3ほか	15-212	612	38度 14分 37秒	139度 31分 7秒	20080416 ～20080630	2,670㎡	日本海沿岸 東北自動車道 建設

発行年月日	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桂木田遺跡	散布地	弥生時代中期	遺物集中地点1か所 土坑2基	弥生土器　石器	沖積微高地上 住居か
		中世以降	炭化物集中地点3か所 溝7条		

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第195集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXI

桂　木　田　遺　跡

平成21年3月25日印刷
平成21年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社　文化
〒954-0057　新潟県見附市新町3丁目6番14号
電話　0258（62）0558

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第195集『桂木田遺跡』　正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	３８度１４分３７秒	３８度１４分４７秒
抄録	東経	１３９度３１分０７秒	１３９度３０分５５秒